大岡政談

村井長菴調合机

四編 下

元岡徹太郎編輯

873
12

へ14
873
12

へ14
873
12

大岡政談

村井長菴調合机巻之十二

東京　元岡雄則編次

第二十三回　一僧の説諭賈人歸心を決む

其言愛語の力なる哉。約束する事雲霧の如くあきらかに英雄豪傑の志乃ち[illegible]
所にて[illegible]職夫婦俗の然く[illegible]滑る事に[illegible]恵を[illegible]郎に對
語せし。猶云の義氣[illegible]く。[illegible]地位[illegible]代に適き[illegible]て宮崎村の民[illegible]
る部屋[illegible]問り[illegible]き。[illegible]都の住居心に任せざる[illegible]を述べ先
乃日[illegible]ふ[illegible]る。[illegible]を思ひ出ず。[illegible]に田舍住居せん決
こと[illegible]く。遥[illegible]帰り[illegible]の恵言[illegible]を飾つく[illegible]き頼みけるぞ。
我是[illegible]周[illegible]つく[illegible]長頭何事成[illegible]て[illegible]汁と立てんけも[illegible]

只管うかがひ見るに、まことに重うり。元より商ひを達者なる中藤く我家
に有く何商ひをも。其懐中を稼ぎ見るに、ほうり社湯掛りも来
郷あるどでに事言うり至て物を軽なれば心安さに言もよみなり。貧
者乃人金も赤集りあんと。無識一又問物へ出ても宇沢杉へ今
尚遠山後の家に勤先居るや。何故に身や同道なく遠ざると
云に恵を御稼作り。宇沢杉とも嘉てしり眠と九兵衛る郷ときき
う聞けり。さて人乃家代りの人へのらを。如此り迷りのふ成らん。
長病を途中に掛合ぎきまぎれ間有く。儲ふるも為ぬ。発
見の御り。一封のさ書と中弟行り何也村有らるべくと答出るば。
さて事も有べくと。先忠兵衛と体をせしめ。一日と過く歳暮決

忠兵衛が内つく酒る掛。我東寺尾と成る材落に。一の家を拵へ
持ち。何と藤さんや。是宇沢杉が四の家なり。彼方郷く郷く時。
者に家地面と譲り有るが。宇沢家に不思議有りやく。直と
低ふく我り。藤らん出我も。いり。思へに父宇四郎が時より
く。煙き事乃有る家なりと。故に我意に引信ぬ。
人と思へ。但居せ見るに。夜毎ふ怪者と見る。中貧多へ愛住
出逢と見るとあり。是と苦中病んで。誰も留守居る者。
今西ふ明家あり。月暫く迷家に起作して。夜へ家り
なりらば家の留守居も成く。我も幸ひ。貧の怪我者ぶ。
ざまでも。其人の心乃迷ひより出へ事者へめと思へ。也者へ月

て度々〜申さるゝと勧めらう。忠三郎へ委細とまして。展事深
の悪き家柱〜の思ひ過しも義理に頼ら居むに至る。
我も男なれば。て度々〜我〜見く。そもそも幸に落んと心に楽ぎれども
れこと物を。そ日より宇次松ら四家に移て。止宿と成せり。去程
に徳永主膳。忠三郎ら松代へ道を引しに。家計も困窮
愈出府乃運びと成さるゝ。藩主帝つ等にも。ちも交りの。
主事二使客も当と知し。日と高儀と成さるゝ。怪八横去還
しく宇次松と将〜徳永ら家に来り。忠三郎ら旅の主婦〜次第を
告て。夫元手目的〜そ知る変化。松代中〜有〜んその心高り
こと。徳永ら見れば有り〜宇次松ら見れ居まる。忠三郎ら書

簡を取出し。左一郎に渡さるゝ。徳永い驚く手紙を読揚げ。
聞き見るに其文書〜先祖の恩義の形跡一〜有るに。義理を使り。
分の移住の高儀に逆く。都〜出を紙一文宇次松ら見れこも。深落ん事
共細〜に書如へ有り。渡給ら我見〜く。宇次松其に義理次ら中来又尋来
つ〜引〜ら。無せん密使の有〜事。通を述べ。左一郎驚く
を拵さ。コハ逆奴全く宮崎村へ行ら。逆ひ知〜。まく〜を配り
連ら〜ん。藩を成さるの能ら生の仕落んの。二使者に非
んば為果せ迄る事を得ず。大儀歩有ら。時役を勧めらもよく狂
ゝ〜へば。怪八横去乃二個ハ肘を張て座を進ら。先生の見を以て人
猩を成〜へ。我〜等何で固辞べけん今より出〜〜間合能く。道

無く追付ば有無を云せず暴に縛るとも。無理に捕へ返す事の出来合
見咎むべし。且悪漢なれど勇み立る者なれば。左五郎二人が勇気をも
挫びつは時宜に随つて兎も角も為べし。這奴を捕へ来りて我方に縛
ら。扨さべ其節を以て江戸へ出るとも事成らん。縦令百里の遠きに居る
とも我の厳命をもて引出さんは最容易に有り。未熟れば手段
為難し。迷く行て訪ね当ると追ひ返へば。傍に居る宇治松進み出
て申様私る大る者て二個共当元へ出立候ふ。然れば僕も存て居候
住べし。道口茂兵衛と封候の屋主人其眼を見り無存りか計り居ても
給金もあり宿元る程は母も路用を借求る筋来有れば同時に発
足ち為しなば関元へ赴せし上六村の居所を尋当る案内仕らん此儀

八心安かれと告ければ。左五郎二個は大いに悦びつゝ八物陰の事なれば宇治松
を案内させる事とは長兵衛何処に隠れ居るとも索し出さんと競ひ
有ひ行くは上六村縁まで候ふべし。左五郎は此者供につき二人
客が路銭を手に渡し。頃は享保三年の秋七月二旬。松代へ出立為
しめぬ事なれば此者の二個は宇治松を先に中仙道にのり路と心を
砕けしかども悪党長兵衛よりは遥か遅れたれば遥に追付かずして。
終に宮崎の村落に到り行き宇治松を案内に茂兵衛が家に尋
行ぬ。行けば其家の人々と見るより客間に請じ宇治松を遇付く。
亭主は左五郎に向ひ先生の恩ある悪長兵衛なれども押包む事能はずして。
亭主は酒肴を述なり茂兵衛を呼で眉根を寄せ悲長兵衛如何にも我

を使つて此悪事より始て對面せし男強悪なる和殿を謀ひたる恩義
に係て世話為ん事を云たれども全く其事我が世話を受ん為の用意
にて和殿が素性を知りて身の上を頼むべきに縦て和殿が得村なる
を知りながら人先き立ち事なれば尋ねとは似しが今晩く此元を知り
ほより忠兵衛は云る宗迅に當る在所にて世話し互ぬ二人の罪人より
悪才者なれば此事を物語るべし。和殿も暫く間へ引取りて二人倶に對面。
忠兵衛が事より家の悪事までを具に物語し事数有る逆事し
其儀更に知らず。今宵主より大元を尋ね然らば掛合を成し
ぬ今し。彼今宵寺の村の者よその家に有りし今宵爰に其家
にありし人を頼む其次松は最前より爰の悪事を尋て手前が悪しと。

我従ふる家の何でもる事は知らん忠兵衛が事を我が関係せ
けれども其事をまだ今宵一酒しき。我見るべしと云へバ二使ひ言ひに
第ひ何でも在らる白痴たる事乃有らん事なり我くも是に然し見ん。
忠兵衛が止宿所にて心地よけれ今より電ね行べし宇治松と重両
有りとて蔵屋浦に是を述べ二人は連て彼への家にぞ到りける斯て
人々其家に入り酒を誂へて互ひに喫し。雅行の飛車を体みける
ら目い悉事に書きく。酒料理少なり。終に飯をも食ひく暫く様んと
せしが翌月に又関もどり忠兵衛返り来て煙草盆ぐ己が雷の
内忠兵衛が居る一間の所へ参らせて推しぬども引返更に知る返て
ハ何るだや。我忠蔵に我と欺きしにて営を待ち怪んで推る

成り難きに有るゆゑ、あとをつぐやけば字次郎い拙ハと宿る。
義兵衛ハ相続き性にて人と話く者に非ず、外に子細の有るものゝ
今時の源兵衛なるに何を尋ねん、明日の事に成るべしと云へども
拙ハも注者なく親者と勧めく続きを経に呼ばりなり字次郎も辞
眠と催し同く二侠客が傍に接続しに思ひやる個怪しき者と
見に来り。結旦起出で面く義と問合せるに我ハ大蛇に逢せたるを
見るり。我い汝の丈なる変化に出合ひと見るりとこゝへの変を怪
ましがるり。然まざも侠客等を判断せる事能く思に疑ひ居る
のミ。実に恵まれ家くゝ宿は家に接るゆゑ説の如く懐寄に知られ今迄
兼て高ひの出光城下の旅店に泊り往く逗り来つゝ外より宿と聞

窺まゝバ二人の侠客井の逢ふ口激き居るりゝ我ら通ふ事を多く探り遍迄
らんゝ為ふ事を成らめし推ーりれば急地家を去つゝ思案成ー彼ら
侠客等ハ逗世に因縁有る由と多たる事有り見付られもゝバ恵ひの種と
成らん暫くの間彼ら変に宿を気り居バ変ねばならゝ。亦何地
ハゝ立まん。其跡ゝ立逗り義兵衛に活況をるゝも邪ハ極く有り。
連も宿り難き怪しの家我他の家に宿せしを知るゝ義兵衛
事の有りしゝ彼に侠客人の止宿成ら。旅店を宿と定め懐中の
叩くと接商しゝ日を送り居り。扨も怪ハ侠客の子拙ハ
思ひの変ぜ。彼明ゝ。忠を聞ゝ通ちぎるにもゝ〳〵思とゝ。
義兵衛に逢て。侠客と物語り外に為べき術もかけまゝ字次郎と通

の業因に頼て懸下の町々を歩行て暮る折しも此の日の黄昏
宮詣へ参る道の辺寺ゆく。西岡も悪を閑と見付たり博奕の術と
夫と考へ渡ろう引留むまじ陸人も彼と掛悪を閑を共に非ずや。
待れと結ぶるに甲方の二人乃使客と見るより慌て跡を振捨
て逃んとするを剛力なる博吉小しも動らせず引組て通乃
傍に捨て引倒し眼を怒らして罵る掛巳悪を閑共に同類に
疑ふ要有ぬ出直んと為るの場に至り斯者間に逃き去る
。而悪の所為を見て刑せらるんと思へ。今より捕へて連
去り彼の陳に引出すべきぞ。先博吉と為よく敷間つ縄を掛て揚んと
成を打ち。二人の洗者を随へ帰る。老法師。主留つ。此の案件を傳へ

見て身者ハ何所に苛刻き参詣と為るに。見るに古南人。無
ふく数面び見掛たり。瀬戸物渡世の者なり。仏の道ハ人を助る宗
と成も。何事の着義ら知ざれども通り合を物語りわたさへ。
二侠客ハ一寺乃住僧と見るより。叮嚀に会釈。事義乃着語を述べ
彼も只僧ハ少弱つく又悪を閑に向ひ。和尚ハ此の人と合るわくにて脱
ふに道なし。全く人殺しの賊に組せしにやと問へば悪を閑ハ法と撞
僕原より同類にハ非ず。是拵る用向おく。遠て逃場乃地。
中に捨人と思ひ。男を殺せしにハ非ずと答ふ法師ハ双方の云要と
ふて驚く思案敷。何さま狂水の如きを行者り。我今より各別と付
く得さと成。捕んと為一人と吐出の者と見るも思僧とも答

宇治松
宇治松四郎兵衛
帰つく二挟
宮を義長殿が
家に奉公せり

梅吉
梅八

京都に於て。苟も上野四郎町なる東光院の住職たり。二人の人を如何に謀らり。宜き弓。手負を同じんとえに疑へ。進て出で。偽に向ひ。此の者潔心して国を一途に思ひ。我と幸き国を見まるるを為し。其偽幸山に流浪し。賢てにげんと為る心を抱く事なり。歩とまたにてこれを偽に。もるると厚ば。先に場を引き。我さが出而乃家は先の将ほく。義義ぶと。ふる事家へ。彼いくハ。かるを柱らまて。懇に此の者。況術と如見て。なれと。清へば。法源ハ。お長に耳長なる人。俗さバ。善悪も分解ん。もしバ。同くを家に。ふつ。真にるの起原より。ちんと。忠義と。弟めて。先に。迎め。宇佐杉寺。僧。宇佐の村にもつて。義義次が。宇佐へ入。もどきハ。事書為つ。も。而でまるめと人と。者に。通し。陸宝つ。忠義に。ひ。快ら。

ちと。て。を。稲ハ。和義。に。事。故の。ひと。陸し。我。義。ら。心と。照し。なり。時と。毋。人の。ある。葛。義の。源。出。ると。も。初。ま。ど。ハ。世。陸ハ。今。日。陽り。なる。二。人の。方。こと。帰。玉。育。ると。も。彼。ま。ま。ら。こと。も。互に。多。別と。成。ら。人。う。我。隠。と。ま。ら。と。云。故。ち。又。二。体。書。ふ。四。つ。く。方。寿。寺。幸。ひ。に。忠。郎。ま。と。逆。寺。ら。多。り。今。当。人。に。郎。り。し。ゆ。く。ま。ど。彼。今。山。陸。逃。陸。ま。ら。多。ふ。も。初。関。係。を。陸。く。も。ど。宜。安。計。ひ。多。人。と。怪。ら。ど。述。た。り。山。時。老。陸。ひ。一。陸。の。人。に。ひ。ま。ひ。ま。も。事。の。こ。陸。と。ま。ど。為。陸。方。と。ま。ど。ま。陸。と。敵。し。陸。ま。せ。ん。暴。と。ひ。ま。ひ。ま。陸。と。為。も。陸。陸。に。陸。陸。と。雑。ま。ど。ま。ハ。ま。り。。陸。る。ま。ま。く。る。の。の。記。ま。と。ま。ん。と。云。ハ。ば。。陸。吉。陸。ハ。の。二。個。陸。と。進。く。一。伍。四。什。と。陸。り。。聊。も。ま。に。陸。に。進。く。事。陸。ま。ど。。吉。ど。。陸。ハ。陸。進。く。忠。

を聞と呼出し。今二人が相宿る始末。夢語とやらんが怪
しき行粧と見て事を問ひ糺すに。誠に其通り相違なし。
扨て。然る事に及ぶまで。和尚も亦恵信り見るべしと云に。
恵信は二使客が云ふ異なる事を聞て。只そは和に泊人為
まで今年の今に至り。後まで僧人と為るの外も又隠に人殺しの
咸出あり。如何なる時を蒙らんも知れまじと。是等は為と案じ頻
ひ一旦身を隠して遠国へ走りわかれば。此の企も止むべくに思へ
ハ此地を離れまくと始めく。獄中の有の任を告げ。考法済
忠地を立つ。二僧人に出るも何で主刑を免れ。其の咸を書
敢て咸んと為るの人心膳初らざまバ。近隣の人も事で止るを

為ん。因果懲報の理。既に命終の時。おのづから見えく。是こそ
弟を殺し。金を奪の他。他も程くの悪事を為ん。是を諸ま
衆庶家民の為ゆ。人の為まに非ず。今世に悪人有り。能く人
を殺し。金を盗む。和を乱り身に迫る事頻りなり。何も人逃隠
しも。逃がるく災禍を為ず。竟に遠ぎしく公に訴へ。其悪人を
殺し。被害を除ん事を思へ。長蕃寺に和を逼らず。故
に只外変事に思ひ仏の陳に出る事を苦に。身のこを通ん
こもまた。已に稔さべきを知り。今何で義勇もなく。逃るまじ。
善く善に助け。悪を悪に懲べし。仮令和を服従連れく。逃ん人殺し
の咸出を。原吾に組せ。乃意又主刑を受くるに非ず。故に政

通ず氏を懲おとさ〻く。功の疑ひ〻きいさく〻。罪の疑ひ〻さい
軽くさ。恐さく変に非ず。愁に逃隠さ為ば返つて公の疑を蒙る
事有ん。其理を辨へよ。心昏迷せば好先を計る事能はず。恐怖
〻さく却て神罪を重くさ。病の至りくさ説き諭す。怪普有つる
五事の似たるを挙ぐ。五つを語り申さ。努々疑ふる事勿れと示
し給ふ。恐を除く傍の説諭を待て漸に恐怖の疑惑散じ感激して愈
苦に堪へ帰り。僧人為ん恐を摩さる。夜寝ハ深く夜に成て寝
傍の丹波守。安らかに休ひ給ふを待て。彼人を呼び
寄せ起て。連返らんハ好む安に非ず。ヤヨ恐を除き甚作ん僧
衆を集へ決て安一有の僧を言と有さ。〻も傍が説る〻

事くを辨明まわべく心苦しくも此度の僧人ハ骨折られ〻へ
ば恐を除も快く平癒なし。金帰宅に事決りぬるの後後ハ僧
に当番く心有る傍く思ひ為ば獅子に頷をつ〻く問ぬ法海先
も顔みぬ外事を問ハ禅学さに似さも僕が家に不審なる
事ありく。里の古老も其数を解し得ず。ソハ何者ぞ。如此ものの
窟窠泊りする者夜毎に怪異を見て捕ると中ハ脱ぬ
見如何ある故ぞ。信仏智力を以て決断有べ。有難さ事にさ
もなり。老法師膝を叩き曰く。見慣を拭めたるに非ずや。人怪を
問へ奇異を語ばず人物の程ぞ知らぬ時ハ必ずや虚説妄説を言と
し。竟に実説を知見さる事さに成る。夫人病に苦しく成ハ辛苦

紛雜又在怒哀乐の情に依く種々の変と見るハ皆常のまに
く。智者才優も性情安きに有らず。聖人に変ぜしの語ハ非なり。
徒に曰く我亦変に関ぬと見ぬ。孔子も宜へりの仁ハ聖人
も変と見るるの常に有りしと。先四心の速ひより見て怪変なん
と。無ドトれば字沢教面を直ふして言る様なにいぶ。コハ其家ハ有
僕が宅ハ昔より怪有をつらぬれば恵を御を得達んを要ひ
に主人家に帰り変を減ぜ僕と初め来の方も皆怪変を見ぬ事が
同変減に虚疑ハ非ず。彩の如んぞ家廃物を成ん者信ぜ人事実一酒を怪
変を減ぜ国を起る根原を探り。妖有ハ陰御を帝ぶ祝を無
ぬ。頭づきを乞なる事を先事ものの母をまさくるゆくかり

第二十四回　肝膽を摧ひく智士出詩を決ず

字沢松が乞に依く老婆甚家に至るん恵まりわ義を所も深く去
祝部人博吉等も法ものと言つく。又其家に宿せん出を出つ行ぐ。
雑命の面く皆都うんに決し。是に家の男共まぐ赤陽ハく。字
沢松が舊宅に至り手夜衣寝に就にり恵ハ静寂ぜして一天沈る
ぬく。雞星光りを競ぬく。山家の夜色祈く遠寺の鐘。熟眠し寝る
うも。景光多郷塩業の地より。俄則し人偶ま斯る孤村に
宿まるを物新さにしく珍らしき一興市見。老法ハ眠を信き
ぜしく。人燈下に書と復居かるに字沢松遠しく起出て。老
僧が間に入手り。頭に汗しを述る様ハ。僕一睡しく汁らぜ異る

美と見ひぬ其状恰の美に非ざるべバ。笑ひ合ふと言げ申ス。
かゝ〳〵まぎらはしに何家にもあゝ個の女出来つゝ我が枕元に
たゝ一つの瓶を置みるゝ笑ひ〳〵。元揚く笑ひ見べ蓋に天理
金の三字を書印し有り。我甚敬と知るべ不審して字義を問へば。
文字の畫と悟藏せず自ら甚嘉と知んと養へ忽地手金形
紅の円さ光と変ず消失せひぬ。美笑ひ〳〵の後不思議の僕を
手に取と解〳〵ほと疑ひ。光法師の高下を問へ。何年判形成〳〵
ゆゑと元問ひぬ茅舎半る角〳〵ゆの物者に服を笑し。皆傍ら庭
前に集ひ来つゝ思ひ〳〵に判形あるわゝ。僅有〳〵意を解〳〵
分る者申〳〵。光法師稍有〳〵歩微笑〳〵我甚〳〵を解〳〵ゆ〳〵
手づゝ紙と筆を〳〵て天理金〳〵の三字を書。増減〳〵増〳〵減を
有り。思ひ見て天の字乃一畫を減せば大の字と成り。理の字。吁乃一畫を除
けば。埋の字と成り。又金の字に。二乃点を增せば。今形字と
成るかり。別ち天埋金是を逆〳〵演時。大に金を埋む。と
へる語〳〵成るかり又瓶を無くゝ多形状ち。此美を以て未決
せむ家は怪事。必らず古申ふ埋うる多形。金有〳〵ん。夫霊人
徳有るゆ又人乃霊身添居るゆ。無に有〳〵試を取堀申〳〵見ば。
疑惑の散る御も有〳〵んと示〳〵たり。庭中の人〳〵大に感じ。実に
文字の表い左有るゆに有べけ也形金の埋り有〳〵んも。至而有る
賢察に及べと協り試んに東西南北庭中此の第内何ものの知と

こまごまと探さば一物を得んや。言傷幸に是を占ひ平しかるべ
き雖き事にてそこ。面こ強く方角を押し問ふ者傷ぶ曰く。我
易者に非されども。爰の人物に由て卦を定め。断り見ん女問ある
紅色こ愛じある。是大に離の卦に当たり。説卦傳に曰く。離を火と
為し。日と為し。電と為し。中女と為す。其形ち大いに燥ぎ又曰く
離也こは明なり。萬物皆相見る。南方の卦なり。有り。是に由て国
を求めば。正しく家乃南にある。五中に有らん。夫離の字義たるや卦
に於ては是を況ぶ。離別の意のみに非ず。附也。別也。離也。又麗の
意なり。物の定理なる。つひに定まるべきなり。故
に離の卦後に附るを含めり。則ち上中の一物。久く疑はしく。今人に

附くべきの秋あるなり。我占ひ当るや外るや。明白地を掘て
探し見らるまよ必らず当らざるハ卦めらるもあけり。はに於く
義疑ハ字沢杯等こ高識なこ。兎も角掘り探らんを待こく。各
傷ぶ席上を退り。再び寝に就けるぶ。暫くこして地に若も明られ
ば。神義決傷ぶ示せこに随ひ席を外し。家の南方ある地の下を掘り
探るに。深さ三尺余ゆこ一つの瓶を掘出したり。蓋を取り中を
看見せバ果こく小判百片を得ぬ。程一通の書物あつく。是を
讀めば。清世子孫家愛今落の節。清水に用ゐ屋き乃文字。清水有
つこ。字名字右衛門と記せり。面こ寄異の思ひとかこ。言傷の占考
神に通じ。凡人乃業に非ずと。驚嘆ハ止ざりける。彼うち

婚者
貧乏神
貧乏神
貧乏神
貧乏神

婚者を
くる傍輩
を婚ひ
し
婚八
老傍輩
貧歴

義藏が実父宇右衛門儀が葬礼。銭元とり
費へ有り。其の一書直段はしたかも速に取寄せ。今回再興なる
和尚ゞ有く幸に此金を以て。家田畑を取戻。農務を勉励して。
先祖の家を起せ。家我もに今をしぐで。再興の基成らんと申。
親中乃合手く。宇右衛門に投票吉けり。宇右衛門
舊家に立帰り住と。速く苦幸孫勇〻。後に富有の身と成〻
こそ。去ても老偽。流弟が事中〻。財産はくべきなる者て。学の在代
の懐中に入り。二月偽りと這留せしが。南海て近侍の名山僧地を拉質。
不圓も此の人に関係し。帰国なる地同じけまば。故人懐害毒に
同伴し逃らん中を為偽りまれば。二使者も怪を脱び。藤〻藤〻の

訳蓄と恐へ。恵を閉塞。宇右衛門儀。義藏が実父に別を告げ。義藏が
地を捜ひ出ちまる。掌下引抜を郷にくい。使者右衛門等
二使者が悪者此に有るを。同く意〻驚かく。殊更左一郎ハ百事
に心遣りなく。使者等恵を閉を捕へ得く。難去ることを有〻む。
対面に中り。若干金の費る事も有ん。修行仏を為ん。人を対面
と夢もを多り。肝要なる物ハ准備の金あるとハ整へ。
後と考ふ恵ひ。ふ〻んと。右衛門に南浅成〻乃ものも。鬼角に多
分の備金も整つて。修行方あく左一郎妻乃志徳に次身を況合あ
逃るを事故に掛り合て。中道に〻〻慶る事ハ為〻難〻。宝斯る時
の為〻第〻合せ。主海て法。九度を御有り。吾姉ゞ我に懇らと。

玉緒の一刀。何れゆゑを質入せば。あ千の金と換らん。怪こうつゝふと
示し。慈〻伊勢五ざを菅。久八別く心安うり。彼が許に持行て。一商
儀成ぐやと。刈ち二刀と携へ五ち衛ど店にもつく。久八と尋ね。
店の若人對る様。久八が身に事故有つゝ。迷くに暇くなりうり。
主人儀事第ち家内人に語成しゝ。恋に成て事面ちに。
左二郎目等連へど。往方知ず。主五ち衛に逢て。今の有る都
と述べ玉緒の紙を出〻。移時質入せん者とゝへば五ち衛刈ち
展見しゝ。能宝の道と知ざれば。迷ちもぞ。そして者く縊
宝家の目利と彩ち又刀剣商に引九の事と入ちもるに。何ぞも面今
しり餘の高價と宝なり。五ち衛直の値ちと潔知り。竟に八指ち恋の

今を貸しゝ。左二郎今を懐に納め。事濃く後久八が暇乃
因縁と問に。五ち衛事実ち様子。只今の事ひ迄ち有也
儀ありゝ。大に財の。左二郎家の為に男ひけもぐる。ち有ち
と引清し。際ち有もば。手任に寸拵の。家法ときして別も渡り如抑久
八が家と放逐さるゝ事実。何ぞ者く言めるに。千太郎が左示へ通ひ
しり。店のゝ何ちく混雑し。物の計算別ち雑きる見ちく。五ち衛
手ぐ心と痛め。物の計算宝銀の出入お然ち有る我方乃。引く曖
昧ち事のゝ多き。家の喜ち。北ちりゝく。自ら怪面と操
十歳盛を知ち。久八等と共に店に勤事と成しゝ刈ち。
為に五年間の今を出ゝ。ゝ方とちらぞ。五ち衛程

法根面を洞くらへ入に向ふて疑ひ出せバ。千太郎が折々来りて
し金子なりとも是ぞ洞くら解るに及の不足させし五十両
君の為し業ぞ。其方が不埒を止も冷備とも為さべし
を。独に悲しき遊たる千太郎久八へ暴て新なりんと知ゝ
他人に讒きし科あらねバ。久八ハ猶を推して五兵衛が前に進み出て
是より年の間深くの古主の恩今此に報しの時に候
推不に違ひ道し。併乃母今引負に成りしが前勤
出ん洞もなけれども何卒五兵衛の御情千太郎が身
に懸り。勝まる家よく迷へバ。五兵衛起居と活るが為に報う。
伊勢五が肩乱義きて汗御と交し肯に十面

大金之主用の権を以て商店の進退自由を得し
猶て大勝者。今分別盛の年と成り。式巻勤有て数しり
石町なる新六を呼寄せよく教図る。千太郎我と
る人八が事たれバ。己も心を尽して叱又と宥めけれども五兵衛
入ても更に新六を招き寄し。之八が不埒と云渡し
て引負の金月割にして竟に今まてを示し。引取の
言しめて情なくも久八を引渡しけり。新六ハ鐵乃名も
に驚き渋かなく之八を将て家に連返り眼を念じて
人の世話事殺面倒しかども今夜の如き始末に遂たる事なし
年の苦労を遂げ。主人の恩恵まく。今に支店の家を創立ん

突先に知り、少汁の程遠と悔まれども、遂に及ばず。白陀寺を為し、何すぞ我身を知らざる白洗くし罵り叱する狂うて其名を善太郎と呼んで、彩六が家に尋ね来り、主に逢て詳に引負の金を身に負て暇を乞へ。頭素と相宿り、誠に忠義一途なる。久八が謀ひ出せし世を忘るべきに非ず。我家と相續為し、日ハ必ら忠孝して、元の如くの身と成さまほしん。こハ浅の濃なる為に一紙を渡し、無くして、引負の金を身代りして、引受なる恩義忘却なる事を書し、性質自元の身に戻り、遂べき文言を載せ、とづる者人に渡れ、けもの彩六始て涙さを細の有るを知り、面を赤して千吉郎に対し、久八が言葉を聞く、僕ハ少し推しいく彩六の放蕩を始めて守て、疑惑ふかるべしに。

市兵衛の最妻、物語に涙く手を拭ひ、初りぬ。忠の為に身を零す。何ぞ難ずる事なん。彩六ハ久八が誠忠を知らざる孫、市兵衛を悔て、悔まれ、迷く市兵の涙を見て、僕が命を変かうと云へば、手を命も惜ず、市兵の恩を知り、四人の金を出し、久八に渡実、彩六借主まる知り、そこをとして何やら商法をして、我ハ法まるを待居ら、もとよ彩六ハ人ハ罪ハ法、我に必ず責め、為めらるべ一部の詞を残して、逃げ去る。彩六ハ久八に対り、罵り、ケるを愧ず、頻りに久八をいさわり、涙に呼、赤誠、情素知も、力と為さ、世を過ぎ、南ハ和成、時乃まるを待べし。力と貧つも、細資金すん成るべきの商法を工夫。大家に成り、身の自ら細き商事に泳けもば、只一人の身を送るべ

為にこそ。紙屑買の渡世とぞ成さしめけり。業柘榴達の宮ろかき。
実に昨日までは巨商乃至農こそ。大勢の壮佼を指揮せし
身の今日は千草の股引に木綿の帯を結腰に權衡を横へ
なる商体見る影もなき賤民の有様。まに〳〵物い振楽こそある
温袍なり。珍器雑具の類ぜ〳〵と始め古綿を拭の切端まで。何樂
なく。業るべき。哭〳〵。甚日々々を嘗しけるが。萬実孫仁乃腔
東よりの商法の彼岸に連ひ。国雅の家と見まじ常に心と
密して恋をとなる〳〵宮ひ九の状。暴者の紙屑買と異りけまじ。
千を郎が要へなる五〇両の資本金も忽地に磨り減し。獨の活計
とこそなるなり。容易に非る身のこゝに成り果ぬ徒来五郎。遂て也

等の閑居を学ひ〳〵けまじも。海内を為んの際陸人と教ふに眼
なく。此二侠客が帰着のこと待に漸して博吉徳八等。師弟の二傍
と共に恵を謝を儀して返りけまじ。五郎安堵なりつ。此人〳〵を
我家に集めく脱〳〵顧客の酒宴を催し。異に信濃流の多
寡を学ひ〳〵。只管老法師が業の流儀を会得なり。但特長
密に恋を訪ひ我語〳〵も彼が心の変ぜんを恵ひ。彩なく〳〵心を
砕り活り切り。己等の人乃心腸。武士の胸中と商〳〵ろまで。成べくは
沢事迷に惑ら生ぜ〳〵。密宿が五郎寄岳彩我まに凄
なり。今〳〵法に聞つ〳〵。其運びを為んと。毛〳〵ろ二侠客を手を將く。
義侠に成り。吉徳つ等と海江の客を繕と商議なり。鬼も角も商人

なる後家のお満に頼ひを上させまゐるべしと仰あれば六郎右衛門
斎一郎の二個お満と倅なる長助とハ今日の死に赴きける抑此の長
助ハお満が継子と云ふことにて家を出て去しが當今大岡に知ゆる事縁きの男に
て有りけり斎一郎先づ対面なし遂に本掛が狼藉の物語してお満とて
再應の吟味を受け夫の治兵衛を害かん為に之を告げさしめ探索を遂
が拷問を以て事実を述べて悪人已に伏し有るハ何卒ある其を九郎ひ
其の主を盗賊と為さしめぬ長助ハ心静に始終を聞て扨も思ひ在
有る悪人なるを我も力を尽て扱ひ見ん然し乍ら一旦中山氏の
吟味を受くる落着しける再び私の及ぶ所にあらず裁許を受くべく
に於いて通り行く事すべて有るべからず罪ある悪人を衛留め異

変ありくバ手ましゆく仰せ被下之第が一気揚ざる可有らバ雖然に
紋まくるも目前揺くに有ると其悪の斎一郎此の詞を聞て無拠長助が
拷問有るを知り則ち悪を露を顕はす連座しける実より深く委
去年二治兵衛等の相譲人多く有るを知らし我差掛りて嫁婦人の
家督を見捨難く且お満が貞心を憐み幸に此事を常々せまするに
其まり親しくハ少しも力添へて補ひお満が富形を遂さしめ是に
と懇に教へ云へバ長助お互に拷を人の人々らしく我
扱た侭り有り悪人の悪を顕はすに右詞の如くあるべし外に気遣ふ事の
り然ども未だ対面せざれバ今より飯田町に同道し我ぞ為に対顔せん
君と共に伴して赴かんと云へバ斎一郎大いに悦び直に長助を将て自

ら忠之丞が住居に書面をもつて。第一期に居る忠之丞は見んるよ
り二個と在に清ど通りの礼をつく。長助ごるを同に左右出張
が住居の部を出ると作。一通りるの由を知らしぬ長助を知らも
げく。忠之丞に向ひ左手の黄粉る赤羽根の道中に出張に逢ひ。
名指の血と見て怪しき同し怪う特に切殺さまし
旅人と見分たる事なれば指有り。後掛が書の本藩再び
の形とらるるあり。其時の作人に異変なるあり。必ずらも居
ると中我扱ふ後ちまべ改めて同事をもくとえべ忠之丞面
を撫げ。ちるとの性猟人中に必らず相互中べ。出田で人殺し
は名為と決るるは中に性をえ雖。コハ推量なるとと巻まべ

長助歩ひ。儀に尤の仰く右の條。呂あ然と中立ちべ取
調に成べきにて氣毒ひ為ると。和後が雖仕成らぎる程。
謀ひ中べし。時宜に彼ひ赤能く心添ろんと慌えべ忠之丞
弱ち。暫く思案して再び孫八白洲に対決の期も幾
度か有ぬべし。僕未ぐ預人と見知ぐ事合有て。お互に為分
らぬ。今より赤恥に出張仕り。本藩を始め隣の人々ふも了度ハ拝影
を待し度と清へ。主弟黒ぐふ膳を打ち。コハ嘸まるる。
速く面会有く。何に隠ぐるり有らば。敬度も怪し合ると。我輩
又毒殺人と迎るかり。要ひに同般有らば。ぶちに使ひやさん。
少しも毒を為らるるとと。清へば忠之丞やをるとて客指を

被文人嘲て溜息吹き思へば我独痴けて老い行くぞ。うしなさ
事と云出て今日八人の身の負い我身に陰うる罪科の来怨み
き歎きの思ひ日に増さて憂さに世渡りの何商も絶つて見る
て涙きの落涙憐れまるべくと水潤もつて出るを素光物もん
迫き男こそ。元便に思へば長助が衣類の塵埃掃つて立ちぐら
忠を潔を尽づけ。和度事に別まとみて相ば別に病しく立
也葉〳〵うハ易きこそ。たのこ怨まひそこそ魂さめつ
左郎こ昔に溜所を出で帯返して行連れ求め

大岡政談　村井長養調合机巻之十二終

大岡政談　元岡雅則編輯　近刻
伊藤静齋図画　聚栄堂梓
全部十冊
此書は嘘説を主とし事実の知難の異説より出て壮絶奇の事実に拠り大岡忠相の治智巧謀の浮容を記載し尽くに関係するの人物も尽く明瞭を要し奇談珍説その尽くさを添せ一書かり

明治十五年五月十五日　御届
同　年六月十日　出版

編輯人　東京府平民　浅草区浅草田原町二丁目十五番地　元岡徹太郎
出版人　同　浅草区浅草三好町七番地　大川錠吉
出像画工　同　同区浅草西三筋町三十四番地　伊藤静齋
浄書　同　下谷区下谷西町一番地　大代蔦屋
繡像刊字　同　深川区深川常盤町二丁目七番地　厄田長次郎
発賣書肆　京橋区弥左衛門町十三番地　武田傳右衛門
浅草区浅草新福井町五番地　高梨彌三郎